



①勝見友彦さん。時間の流れが全く違う東京と物部町で靴づくりを教える ②一生モノの靴。どの革で作ろうか ③和やかに、真剣に。それぞれのペースで作業が進む ④教室の様子。朽ちかけていた古民家は息を吹き返し、人が集まる空間となった

暮らしの中にもものづくりを。手を動かして物を作る喜び

受け継がれてきた物を作って暮らすという日々

「base works」という店の名前には、暮らしを取り戻そうという意味を込めたんです」

ここは物部町大西にある手作り靴教室。その主宰である勝見友彦さん（50歳）が、そう教えてくれた。

大西地区は、物部町でも山間の地域にあり、10世帯ほどの人々が暮らしている。勝見さんはこの土地を6年前に初めて訪れ、一目で魅了されたという。「地に足をつけた暮らしが、ここには色濃く残っていると感じました。集落に暮らすおじいちゃんやおばあちゃん、畑を耕し、必要な物を自分の手で作りながら暮らしている。こういう環境で、ものづくりの魅力を伝える仕事ができればいいなと思いました」

勝見さんは東京生まれ、東京育ち。36歳まで東京の会社で経営に携わってきた。その後会社を辞めて革職人としての腕を磨き、渋谷区の専門学校で靴作りを教える仕事を始めたという。

「東京は物にあふれ、便利で、スタイリッシュ。でも、暮らしのことを考えれば、私は地方に魅力を感じました」baseという言葉には、土台とか基盤になるものという意味がある。人間らしく、本当の意味で豊かな暮らしをしようと大西に移り住んだ勝見さんの仕事は、その暮らしのベースとなる『ものづくり』を教えることだ。

『ものづくりは暮らし』

その思いを伝えられる場所

「東京で靴作りを教えていたとき、私は生徒たちに、いずれは地元に戻ってものづくりをした方がいいと薦めていました。ものづくりは暮らし。地元に戻って、その土地の暮らしの中で、自分なりのものづくりをするべきだ」とそう言いながら勝見さんは笑い、「でも多くの生徒は東京にとどまる。なぜか。自分たちの田舎に帰っても人がいないから、物を作っても売れないと言うのです。私自身が東京に住み、東京で仕事をしているわけですから、どこかうそ臭いというか、説得力がないわけです」

勝見さん自身、いずれは東京を離れ、地方で暮らそうという思いはあったそう。妻の麻子さんの薦めもあって来高し、香美市内の空き家を巡るとき、まず最初に案内されたのがこの大西の古民家だった。いまでは見事に改築され、明るい雰囲気の間取りとなっていて、当時管理もされておらず、とても住めないような状況だった。「でも逆に、この家を直して仕事場にすること、そして、大西という山間の集落でもものづくりをすることに大きな意味があるんじゃないかと思いましたね。ものづくりは、技術とアイデアさえあれば、どこに住んでいてもできます。そのことを身をもって示すことにもなるんじゃないかと思いました」



特集

ものをつくる人々 ②

革職人 base works 主宰 勝見友彦さん